

山形俊男会員がスヴェルドラップ金賞を受賞

山形俊男会員(東京大学大学院理学系研究科/地球環境フロンティアセンター)が、2004年米国気象学会スヴェルドラップ金賞(Sverdrup Gold Medal)を受賞した。授賞式は、去る1月14日、米国ワシントン州シアトル市で開催された同学会年次総会において盛大に執り行われた。近代海洋学のパイオニアである、かのスヴェルドラップ博士の名を冠したこの賞は、米国気象学会で最も権威のある学術賞の1つであり、海洋と大気相互作用に関する研究で顕著な功績のあった研究者に授与されるものである。我が国では1988年に光易恒氏が受賞して以来、2人目の快挙となった。同時に、山形会員には米国気象学会のフェロー(特別会員)の称号も授与された。

本賞は、山形会員の「海洋力学および気候力学に関する研究、特にエルニーニョ現象やインド洋海域の大気海洋相互作用現象の研究における傑出した業績」に対して授与されたものである。同会員の卓抜した研究業績は多岐にわたるが、特に、1980年代前半に行った熱帯域の大気海洋結合擾乱に関する理論的および数値的研究においては、赤道域に東進しながら発達する大気海洋結合擾乱の存在する可能性を初めて明確な形で呈示した。その後のエルニーニョ研究の発展に大きく寄与したこの特筆すべき成果に対しては、1987年に日本気象学会賞が授与されている。引き続き同会員は、簡略化された大気海洋結合モデルや海洋大循環モデルによる数値的研究を通じて、TOGA(熱帯海洋全球大気研究計画)の成功に繋がる多くの重要な貢献をした。加えて、1990年代以降は、大気海洋結合系における(数)十年規模の長期変動の気候学的重要性を提唱するとともに、アジア・モンスーンの影響下にある地域での大気海洋結合現象に関する研究を推進した。この研究は、「インド洋ダイポール現象」と呼ばれる熱帯インド洋固有の大気海洋結合現象の発見へと大きく発展し、熱帯域における大気海洋相互作用の研究が新たな段階へと突入する契機ともなった。

このほかにも、山形会員は、海洋と大気非線形波動に関する重要な理論的研究を行って来た。1970年代に行った一連の研究は、「中間地衡流力学」として、地球流体力学研究における理論的礎の1つを築いた。また、沿岸ケルビン波による非線形適応現象に関する研究を行い、「急潮」現象の理論的基礎を提供した。最近では、黒潮流量の季節変動における、大陸棚斜面と傾圧流との相互作用、いわゆるJEBAR効果(Joint Effect of Baroclinicity and bottom Relief)の重要性を指摘し、西岸境界流の力学の理解を一層深めることに貢献した。これらの山形会員の優れた研究業績に対しては、1997年に日本海洋学会賞が授与されている。

その一方で、山形会員は日本気象学会、日本海洋学会、および政府関連の各種委員を務めると同時に、ユネスコの政府間海洋学委員会(IOC)や世界気候研究計画(WCRP)の国際委員を歴任した。さらに、旧科学技術庁の航空・電子等技術審議会地球科学技術部会メンバーとして、地球フロンティア研究システム(現地球環境フロンティア研究センター)や地球シミュレータ等の大型プロジェクトの推進にも多大な貢献をしてきた。また、国際的な学術誌の編集委員や副編集長としても活躍してきた。今回の受賞理由には、山形会員の傑出した研究業績に加え、これら気象学・海洋学全般の発展に尽くした功績も考慮されている。

受賞理由と授賞式に臨む山形会員の写真は、米国気象学会機関誌(Bulletin of the American Meteorological Society)本年6月号に掲載されている。また、スヴェルドラップ金賞を含む米国気象学会の各賞歴代受賞者リストは、同学会のホームページ(<http://www.ametsoc.org/aboutams/awardrecipients.html>)にて確認できる。なお、山形会員は、ISI(現トムソンサイエンティフィック)社の文献引用データベースに基づく「最先端研究領域において活躍する日本人研究者」の1人にも選ばれている。

(升本順夫・中村 尚・安田一郎)